

大毛池田遺跡

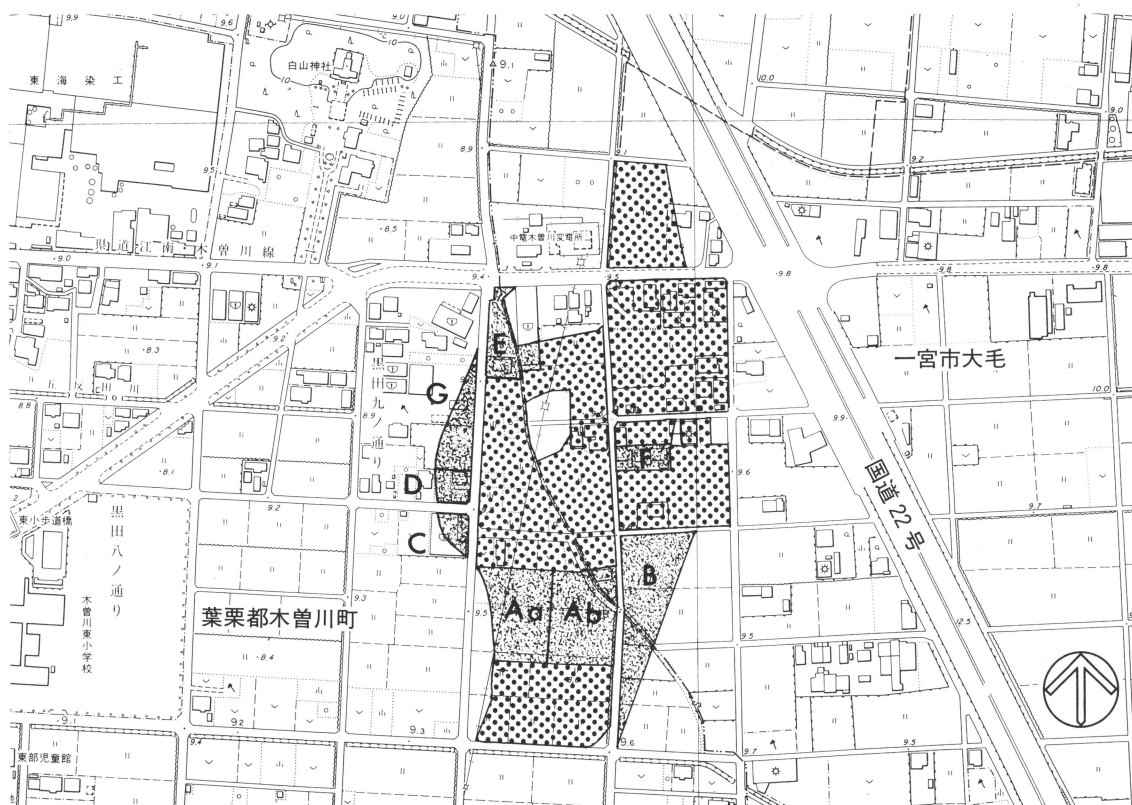
調査の経過 大毛池田遺跡は、一宮市西北部から葉栗郡木曾川町北東部にかけて所在し、木曾川により形成された標高9 m前後の自然堤防及び後背湿地上に展開しており、古墳時代から戦国期におよぶ複合遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査であり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成5年度から継続調査している。本年度は13,400㎡をA～G区の7調査区に分割して平成7年4月より平成8年2月にかけて実施した。

調査の概要 発掘調査によって確認した遺構・遺物は、古墳時代、奈良時代、鎌倉・室町時代、戦国期の4時期に大きく区分できる。遺跡の基本層序は、概ね1層：耕作土、2層：暗灰褐色シルト、3層：暗灰黄褐色シルト、4層：灰褐色粘土、5層：暗紫褐色～黑色粘土、6層：灰オリブ粘質土、7層：灰褐色中～粗粒砂の様相を呈している。戦国期～古代の遺構はそれぞれ2層上位で、古墳時代の遺構は4層または5層上位で検出した。

今年度の調査の成果としては、一昨年度から検出されている古墳時代前期の水田跡が確認できたこと、古代の旧河道とそれに沿うように北東から南西にかけてほぼ並行に走る4～5条の大溝群（幅8～10m・深さ2 m前後）を検出したことなどがあげられる。溝は7世紀前葉から9世紀にかけてのもので、その規模等からみて濃尾平野の治水技術の歴史を考える上で貴重な資料となろう。

(前田雅彦)



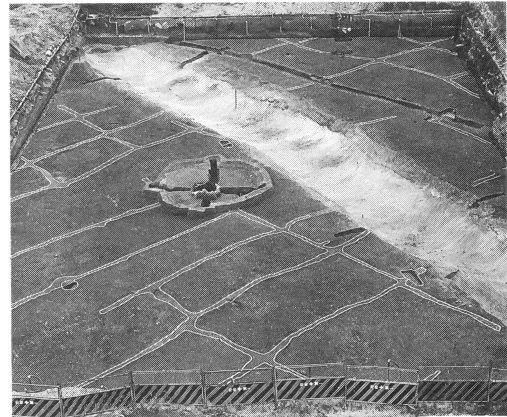
第1図 調査区位置図 (1:5000)

遺跡の概要 今年度調査で確認された遺構・遺物の時期は、以下のように大別できる。A期（古墳時代）、B期（飛鳥～平安時代前期）、C期（鎌倉時代～室町時代）、D期（戦国時代）である。A期では調査区のほぼ全体にわたって水田跡が認められたが、一部水田化されていない帯状の微高地では、大量の土師器を含む遺物包含層が確認された。B期は、一定方向に並行して大規模な溝が次々と掘削された時期である。溝の方向に影響したと思われる旧河道の一部も確認された。C・D期には周辺は集落となっており、各時期の生活の痕跡や道状の遺構などを確認した。

A期の 遺構・遺物

弥生時代に遡る明確な遺構は認められなかったが、大型蛤刃石斧、石鏃数点のほか弥生中期の甕・壺などの小片がA b区・B区 of 古墳時代遺物包含層より出土している。

古墳時代では、A・B・C・D・F・G区で第5層黒色粘土層（Ⅳ-b）を基盤とする古墳時代前期水田跡（下層水田）の小区画が展開し、確認された面積はこ



F区 水田全景

れまでの調査分と併せて約30,000㎡にも達する。また、隣接する大毛沖遺跡の一部分、門間沼遺跡でもほぼ同時期と思われる水田跡が確認されており、旧木曾川の自然堤防の縁辺にかけて展開した広大な水田耕作地帯の景観が想定される。

第5層黒色粘土層の上層、洪水性の堆積層で覆われた上層水田（第4層灰色粘土層、Ⅲ-b）はA a区の一部でのみ畦が検出された。A a区東側からA b区、B区にかけての部分では、水田化されなかった微高地が広がり、上層水田域は北東から南西に延びるこの微高地の西側縁辺に沿うように谷状の細長い範囲に展開するものと思われる。

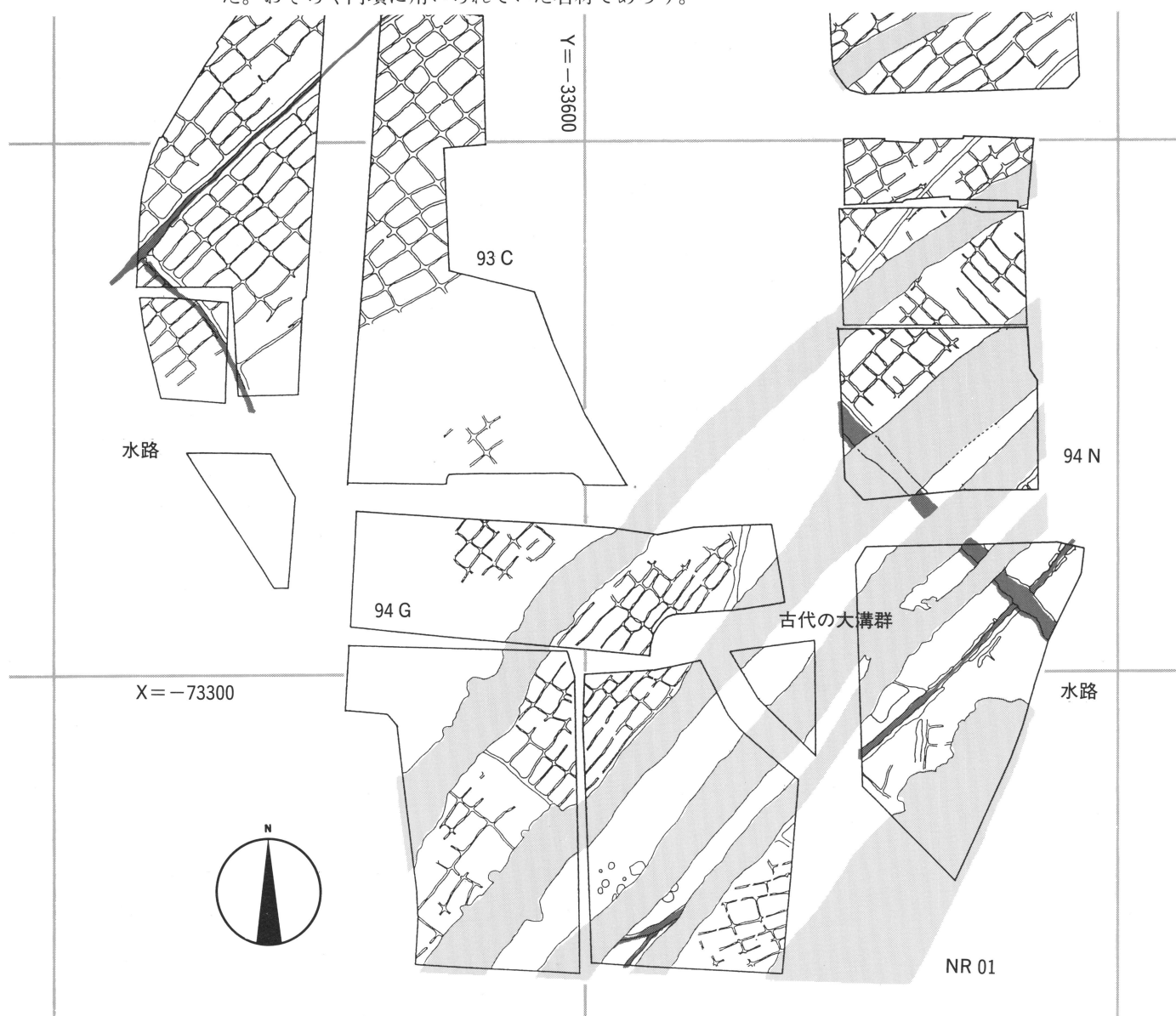
微高地部分は、幅20m、長さ60m前後の細長い範囲に認められるが、中心部大半は古代の大溝（S D51、52）に削られていた。水田耕作地との明かな境界や遺構はみられず、基本的には第4層、第5層が攪拌されて包含層を形成しているという状況であった。出土遺物は、上層水田を覆う洪水性の堆積層を除去した暗褐色粘土層（Ⅲ-a）表層では、宇田型甕を中心に、また上位から下位まではS字甕（D類）、高杯、短頸壺など廻間Ⅲ式期後半～松河戸Ⅱ式期の土師器を主体に検出した。いずれも須恵器は含まれていない。下層の黒褐色粘土層（Ⅳ-a）直上からは、手焙形土器1個体ほかS字甕（C、D類）、ヒサゴ壺、柳ヶ坪型壺などのほか若干のパレス壺を含む廻間Ⅲ式期の遺物が主体となっている。黒褐色粘土層（Ⅳ-a）を除去したベース面で確認できたこれらの時期の遺構には、土坑10数基と、ピット、溝があり、うち土坑数基からは良好な一括資料を得ることができた。

また、この包含層が連続するA b区トレンチ断面の数箇所で見られるような落ち込みと炭化物の層、ピットなどが認められた。残存している微高地部分が狭く、特にここでは上・下層が大きく攪拌され全体が暗褐色を呈しており、明確なプランの検出が困難であるが、遺物

の分布状況からも竪穴住居を含む複数の時期の遺構が重複しているものと思われる。水田耕作にかかわった集落の一部であろう。遺物には須恵器は含まれず、宇田型甕、S字甕、高杯など土師器類がまとまって出土した。

この遺物包含層と上下2層の水田との関係については、現在確認をすすめている段階であるが、Ⅲ-a層とⅢ-b層、Ⅳ-a層とⅣ-b層がそれぞれ平行に連続して認められるとすれば、上層水田の廃絶時期は、松河戸Ⅱ式期を下限とし、下層水田の耕作時期は、これまで考えられてきた廻間Ⅲ式期後半を若干遡る可能性も想定される。

そのほかA a区では、円墳1基を検出した。上部はすべて削平されており直径13m、幅1.5m、深さ約30cmの周溝のみ確認された。付近からは7世紀の須恵器高杯が出土したほか、8世紀初めに埋積した大溝（S D50中層）より直径30～40cm前後の河原石40数個が出土した。おそらく円墳に用いられていた石材であろう。



第2図 池田遺跡古墳時代水田遺構図 (1 : 1200)

**B期の
遺構・遺物**

B期の主要な遺構には、F・B・A区にかけて連続する数条の溝、旧河道がある。溝は北東から南西方向に延びる幅8～10m、深さ2.0m前後の大溝を含み、大毛沖遺跡に近い東側よりNR01・SD51・SD52・SD55・SD50がほぼ一定の間隔をおいて並行して直線状に延びる。旧河道で確認できたのは右岸のみであり、中世の早い段階まで大毛沖遺跡との間を隔てていたものと考えられる。

SD51・52は、A区古墳時代遺物包含層を大きく削り込み、大量の土師器類が検出されたが、溝に伴う遺物としては僅かに7世紀半ばの須恵器蓋杯や土師器甕などがみられる程度である。SD55は深さ50cmと最も浅いもので、やはり7世紀の須恵器数点が出土したのみである。SD50の遺物は出土量・器種ともに比較的多く、完形品も数点含まれる。7世紀後半～8世紀半ばの須恵器類のほか9世紀代の灰釉陶器杯、平瓶、浄瓶、緑釉陶器碗などが出土している。SD50は昨年報告した「美濃」刻印のある須恵器を出土した溝に連続し、埋積の状況や出土遺物の傾向などは前年調査時と同様であった。

これらの大溝群は、一部が調査域南西方向の門間沼遺跡においても確認されている。これらの溝の総延長や深さは、ともに当時としてはかなりの規模の土木事業であったはずである。いずれも旧河道の西側に沿うように掘削されており、河川の増水あるいは氾濫に備えた水防の為の施設として掘削されたものと思われる。

**C・D期の
遺構・遺物**

C期の遺構は、大きく前期（12世紀後半～13世紀）と後期（14世紀）に分けられる。C・D期の遺構は全般的に希薄であったが、それぞれ屋敷地の痕跡を示す井戸や溝、ピットなどを検出した。

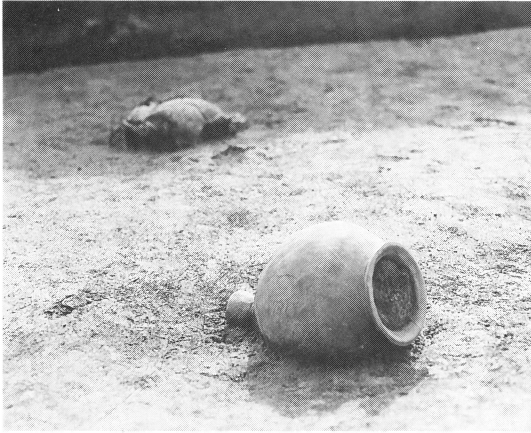
F区は、昨年度調査でみつかった中世～戦国期居館跡の西に隣接する部分であったが、D期の遺構は認められなかった。C期では小規模の区画溝、井戸などがあり、東西にのびる幅1.5mの溝からは大量の礫とともに14世紀代の灰釉系陶器のほか瀬戸、常滑産の陶器類がみられる。これより南のB区では、旧河道が埋没した後「方形土坑」が集中して掘削され、遺物は検出されなかったものの、層位より中世には墓域の一部であったと思われる。

居館跡南西に位置するA区では、削平の比較的少ない調査区西側で井戸、溝、建物跡などを検出した。うち井戸1基では13世紀灰釉系陶器のほか貯木されたものであろうか数本の丸太材が重なって出土し、その下で曲物を検出した。この井戸が廃絶した後、D期にはC・D区より続く道の側溝と思われる幅20cm程度の2条セットの溝が幾度も掘削され、両側に井戸あるいは区画溝が展開する。側溝状の2条の溝に沿って3×2間の掘立柱建物跡を検出した。これらピットには、すべて礎板が用いられていた。

D期ではE区からB区へと続く溝があり、灰釉系陶器碗、皿、瀬戸・美濃陶器など比較的多くの遺物を出土し、16世紀頃まで溝が機能していたと考えられる。この溝は、現在の行政区画では葉栗郡木曽川町と一宮市の境をなす水路に沿って延び、ここは明治14年地籍図においても黒田村・大毛村の村境と推定されている。少なくとも16世紀にさかのぼる境界が、ここに想定されそうである。

(武部真木)

本年度調査区は、大まかに東側よりF・B区3,800㎡、A区5,300㎡、C・D・E・G区4,300㎡のブロックに分けられる。この東西約175m、南北約250mの範囲では、下層水田跡がほぼ全体に広がるのに対して、上層水田は帯状に部分的に分布する。これは谷状の低地に営まれたものであろうか。古代の大溝は、最も深い部分で検出面より2.2m、幅10mを測る。この部分で溝は巨大な土が連続するような形状を呈しており、作業の工程を推測させるものとして興味深い。大溝と大溝の間では、遺構は検出されなかった。



上左 包含層Ⅲ直上
遺物出土状態 (Ab区)
上右 P 51 遺物出土状態
(Ab区)
左 上層水田 (Aa区)

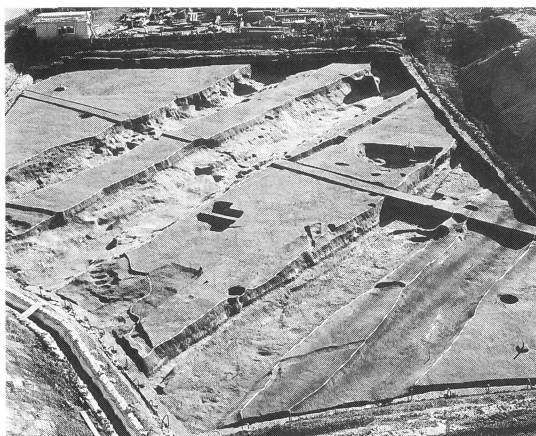
写真中央が大畦



左 円墳 (Aa区 北西辺)



上 古代の大溝群
右端が旧河道
（B区、Ab区）
左 SD50 北から
（Aa区）

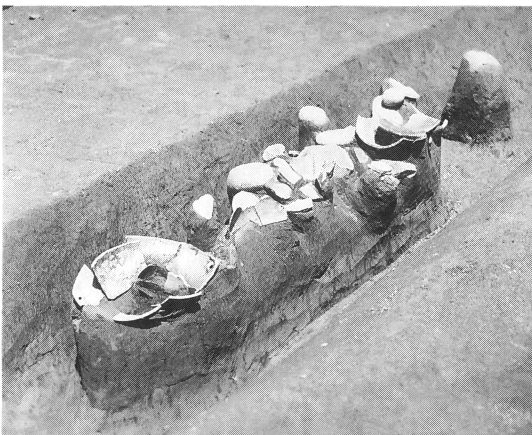


左上 古代の大溝群 北から (Ab区) 右上 SD51、52 南西から (Ab区)
中 旧河道 南から (Ba区) 中 旧河道出土遺物 (Ba区)
SD55出土遺物 (Ab区)

左下 戦国期溝
SD01 (E区部分)

右下 戦国期溝、南西から
(Ba区部分)





左上 中世屋敷地区画溝（F区）

中 中世廃棄土坑（F区SX02）

下 戦国期溝遺物出土状況（C区、SD01）

右上 井戸 下部曲物（E区）

中 井戸 タテ板組、曲物（F区）

下 井戸 桶組（E区）

まとめ 本年度調査で古墳時代については、水田以外のまとまった遺構が初めて確認されたことにより、これまで不明であった水田遺構の開田から埋没時期、周辺水田地帯の変遷について更に詳細な解釈が可能となった。

7世紀半ばには掘削が開始された古代の大溝群は、大毛沖遺跡・門間沼遺跡を含めた範囲で確認されている旧河道の影響を大きく受けており、この流路の遷移とあわせて掘削時期、溝そのものの機能を考える必要があろう。